私見創見 Thursday

子どもには旅をさせよ

家族は最初の社会

畑山　篤

はたやま・あつし
1960年、八戸市生まれ。明治学院大卒。志学塾を運営しながら、全国各地で講演。「勉強部活」を提唱、放課後学習支援などに関与する。全国学習塾協会理事。
志学塾塾長

今年も穏やかな天候の中で新年を迎えた。しかし、北陸を中心に日本海側は記録的な大雪のようだ。テレビの報道を見ながら、寝台特急「日本海」で旅をしたことを思い出した。

2006年から5年間、雪深い青森駅から、志学塾の姉妹校・ウイング高等学院に通う日本航空高通信制課程在学の20人前後の高校生を引率し、日本海に乗り込んだ。ブルートレインは新潟、富山を真夜中に進み、夜明けには琵琶湖畔を通り、早朝に京都駅へ入った。そこから近鉄に乗り換え、奈良まで足を伸ばした。

東大寺、法隆寺…。世界一大きい、世界一古い、という〝現実〟を目の当たりにし、子どもたちは畏敬の念を抱いた。復路は名古屋、信州塩尻を経由して、山梨県の母校を目指す修学旅行だった。

親元を離れる旅は、日々の勉強とは違う学びを通して、子どもたちを大きく育んでくれた。ただ、11年の東日本大震災で、この行事は中断してしまった。

先日、不登校の相談で高校1年の女子が両親と来塾した。将来の夢を尋ねると、「獣医だったんですが…。今は動物関係です」。「動物関係って?」と水を向けると、「あ、ペットショップだけは嫌です!」ときっぱり。そして「動物の売買って嫌いなんです」と。

私は不登校の原因には一切触れず、家族構成、小学校からの部活など、子育ての背景を丁寧に聞いた。父親の会社名、姉の大学名など知らないことが多く、その都度、母親の方を向き、母親は優しく助け船を出した。

2時間ほど経過した頃、「四つの墓参りはしていますか?」と尋ねた。そして、父方の祖父母、母方の祖父母、それぞれの名字（祖母は旧姓）を聞いた。山形県出身の父親と北海道出身の母親は時折、顔を見合わせ確認するように四つの名字を挙げた。

私は「夫婦が出会い子が生まれ、マイホームを持った30代後半、父親が転職、単身赴任…。そんな時、実家に介護の問題が。そのため母親は本業でない近所のパートに出て…」と一般論を話した。すると母親は目に涙を浮かべた。

母親の顔色を見てから、「不登校の問題は母親の責任が100％です」と言った。母親は「その通りです」と大きくうなずいた。子も、うな垂れた。しばらくして、「そして父親の責任は200％です」と続けた。驚くことに子どもの表情が穏やかになり、フフッ、と笑った。

「母親が父親の分も頑張るので、子は家庭が壊れないように、良い子になって頑張る。それが文化祭などで友達関係が変化したとき、張り詰めていた気持ちが切れ、学校に行けなくなる…」と説明した。父親も腹に落ちたのか、覚悟が決まった表情になった。

私は山梨県にある日本航空高の紹介動画を見せながら、一人旅で学校見学をすることを提案した。「旅には、日常にはない出会いと孤独がある。出会いが人生を変え、孤独な時間は子どもをたくましくするでしょう。親の知らない修学の機会を与えてくれますよ」と話した。話が進むにつれ、子どもの背筋が伸びて明るい表情になっていた。

人は一人では生きていけない。会社や学校などの組織や地域との繋がりという社会的な居場所が必要で、人間関係の中で意味を持つものだ。

中でも家族は原始的な人間関係であり、最初の社会だ。夫婦から始まり子を授かって親になる。子は親から多大な影響を受ける。親が何を大切にし、どのような生活をしているかは、子どもの考え方やその行動に反映される。

子どもたちの将来像のヒントは、実は家族のルーツにこそあるのかもしれない。子を交えて両家のルーツを話す機会を大事にしたいものだ。まさに子は鎹（かすがい）だ。

スパコン社長再逮捕

特捜部 2億円超脱税の疑い

車レース損失穴埋めか

東京地検特捜部は24日、法人税約2億3100万円を脱税したとして法人税法違反容疑で、スーパーコンピューター開発を手掛けるベンチャー企業「ペジーコンピューティング」の社長斉藤元章容疑者(50)を再逮捕した。隠した所得は、過去に斉藤容疑者が自動車レース事業で出した損失の穴埋めに使われた可能性もあるとみて、特捜部は資金の流れを捜査する。

ペジー社では関連会社などへの外注費を水増しして所得を圧縮したとみられる。

0から別の助成金約4億3100万円をだまし取ったとする詐欺罪でも起訴されている。

ペジー社など斉藤容疑者が経営に関与する3社には、NEDOの助成金や、文部科学省所管の科学技術振興機構（JST）からの

しなく下山 良かった」

噴石で窓が割れ、火山灰が付着したロープウエーのゴンドラ＝24日、群馬県草津町

運転を止めた。電源ケーブルが切れたのは、ほぼ同時だった。

「脱索さえしていなければ予備エンジンで動かして客を降ろせる」。噴煙が収まると、無線で山麓駅に連絡。見える範囲のゴンドラの安全を確認した上で、予備エンジンを稼働させた。

次々と山頂駅に到着するゴンドラは、火山灰で真っ黒。アクリル窓や天井に大きな穴が開いていた。降りてくる乗客の中には顔や手足にけがをした人もおり、動揺を隠せない様子だった。「本白根山が噴火しました」。停電で真っ暗な中、

どが幸いし、客を凍えさせずに済んだ。全員の救助を見送り、中沢さんも午後6時ごろようやく下山。胸をなで下ろした。

24日、山麓駅で止まっていたゴンドラの床には、天井を突き破ったと思われる直径十数センチほどの噴石が転がったままになっていた。

火山性微動 4回観測

気象庁は24日、草津白根山で同日午後、火山性微動が2回、発生したと発表した。午前に発生した2回と合わせて計4回の微動が観測されたが、いずれも振幅